

身振りによる日本語アクセントの効果的な指導法の研究

崔 春 福

広島大学大学院総合科学研究科

A study of the effective teaching method of the Japanese accent by the hand gesture

Chun Fu CUI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Key Words: 日本語アクセント, 中国語母語話者, 身振りによる日本語アクセント指導法

第1章 本研究の目的と構成

従来の日本語アクセントの指導は、主にカセットテープなどの音声教材を利用し、機械的に聴く訓練であったため、学習者が学習意欲を持ちにくいという欠点があった。これに対して、身振りによる日本語アクセント指導法は、発音の習得を言語の全体構造の枠組みで捉える視点を持つ点でユニークである。しかし、日本語教育における身振りによる音声指導法には、実行方法、指導法が確立されていないという問題がある。音声教育に関する研究論文では教育方法に関するさまざまな提案がなされているが、その教育内容の有効性について、学習者の学習効果を測定することによって検証したものはほとんどない。本研究は、音声学習・音声教育と身体運動は密接なつながりがあるという観点に立って、これに基づいて中国語母語話者を対象に、身振りによる日本語アクセントの指導方法を研究・開発することを目的とする。

第2章 音声教育における日本語アクセント教育の重要性

第2章では、音声教育における日本語アクセント教育の重要性について述べる。まず、音声面における日本語アクセントの役割について、アクセントの機能と特徴の面から考察する。次に、日本語教育の中でのアクセント教育の位置づけおよびアクセント学習の必要性と教育の重要性について述べ、海外および日本国内における、アクセント教育の現状と問題点について検討する。結論として、日本語教育の中でのアクセント教育の重要性について、音声面だけでなく、聞き取りのためのストラテジーおよび日本語音声教育の現状と問題点について分析することによって、日本語アクセント教育に対する有用な知見が得られることを明らかにする。

第3章 日本語と中国語の言語構造と言語機能の相異点

第3章では、音声教育における、対照分析と誤用分析の観点から、日本語と中国語という2つの言語の言語構造と言語機能の相異点について分析

する。本研究は、中国語母語話者を研究の対象とするため、中国語を母語とすることによって、日本語のアクセント習得にどのような影響が出てくるのかについて、詳細に検討する必要がある。そこでまず、日本語と中国語の両言語の相異点について分析し、その上で中国語母語話者による日本語アクセントの発音上の問題点について分析する。

第4章 音声教育における日本語アクセント指導法に関する先行研究

第4章では、音声教育における、日本語アクセント指導法に関する先行研究について検討する。まず、外国語教育理論の史的発展と日本語教育という視点から、言語理論や教育理論に基づく言語教育の現場における音声の捉え方について述べ、次に、音声教育の方法としての日本語アクセント指導法の先行研究について概観する。次に、身振りによる日本語アクセント指導法を提示し、身振りをを用いた先行研究を考察し、問題設定と仮説を立てる。これらの研究と検討は、身振りによる日本語アクセント指導に対して重要な理論的基礎を提供するものである。

第5章 VT法 (Verbo-Tonal Method) に対する学習者の評価

日本語アクセントを効果的に教える前提条件として、日本語を学ぶ学習者がさまざまな指導法についてどのように考えているかを調査する必要がある。その上で学習者の適性に合う、心理的・物理的に受け入れやすいアクセント練習のための効果的な指導が初めて可能になる。そこで第5章では、中国語母語話者を対象に、「VT法」に対する学習者の評価についてアンケート調査を実施し、アンケート調査の分析結果に基づき、効果的な指導法を検討する。

第6章 身振りを伴う言語課題の観察と口唇部支配運動野の興奮性変化

第6章では、身振りを伴う言語課題の観察と口

唇部支配運動野の興奮性変化について、生理学的観点から考察する。第二言語習得の研究分野では、言語自体に着目した研究は多数あるが、発話だけで発話の意図が現れるとは限らない。そこで、第6章では、身振りを伴う言語課題の観察の際の学習者の口唇部支配運動野の興奮性について、運動生理学的な観点から結果を考察する。そこでの課題実験の分析結果に基づき、身体の動きを利用した発音指導法の有用性が生理学的観点からも支持されることを明らかにする。

第7章 日本語アクセント指導法に対する学習者の評価

第7章では、中国語母語話者を対象とした、日本語アクセント指導法に対する学習者の評価について考察する。第7章では、「VT法」とその他のアクセント指導法も含めてアクセント調査を実施する。これによって、日本語アクセント指導法に対して、より具体的な調査を実施することができるようになる。

第8章 身振りによる日本語アクセント指導法の効果

第8章では、中国語母語を対象に実施した、身振りによる日本語アクセント指導法の効果について述べる。具体的には、日本語教育実験心理学デザイン（乱塊法）に基づき、実験群と統制群の2つのグループに設け、学習者に身振りによるアクセント指導と従来法でアクセント指導を行い、音声分析ソフトウェアを用いて指導前後における正解率および指導その定着度による成績変化を分析することによりアクセント指導法の効果を比較検討する。その結果、身振りによるアクセント指導のほうが従来の反復練習によるアクセント指導と比較して、統計的に有意に効果があることが判明した。

第9章 結論

本論文は、身振りによる日本語アクセント指導

法の研究として、身振りは日本語アクセント習得に有効であるということ、日本語音声教育学の理論のレベルにおいて提案し、さらに実験や実際の指導を通してその教育方法の妥当性を検証した。この成果に基づき、最後に可能な身振りによる日本語アクセント指導法の試案を提示する。

①具体的な指導法の試案－身振りによる日本語アクセントの指導手順

a. 平板型（例えば「政治」）アクセントの指導手順。平板型（「政治」）アクセントの指導手順として、まず、構えた片腕を腰の位置から肩の位置まで上げていきながら「セ」を発音する。手首は下向きにしておく。次に、手首をゆっくりと上方に起こしながら「イ」を発音し、手を横へ伸ばしながら続く長音の「ジ」を発音していく。被験者の指導に際し、教師は被験者の「運動」と発音の関連を観察する。体を緊張させないように注意も穏やかにする。

b. 頭高型（例えば「経済」）アクセントの指導手順。頭高型（「経済」）アクセントの指導手順として、構えた片腕を水平にして、肩の位置から腰の位置まで下降させながら「ケイ」を発音し、手が下がりきらないうちに「ザイ」を発音し終えるようにする。手首は下向きにしておく。

c. 中高型（例えば「国際電話」）アクセントの指導手順。中高型（「国際電話」）アクセントの指導手順としては、まず、構えた片腕を腰の位置から肩の位置まで上げていきながら「コク」を発音する。手首は下向きにしておく。次に、手首をゆっくりと起こしながら「サ」を発音し、手を横へ伸

ばしながら「イ」を発音していく。「デン」を発音しながら手を斜めに下げていき、手が下がりきらないうちに「ワ」を発音し終えるようにする。

②本研究の革新点－本研究の革新点は以下の3点に集約できる。

(1) 音声教育における、日本語アクセント教育の重要性についての考察において、アクセントの重要性だけを強調するだけではなく、アクセント産出のための聞き取りのためのストラテジーおよびアクセントの導入時期と使用頻度等について、具体的な論拠の提示とともに考察し、日本語アクセント教育に対して極めて有効な知見をもたらすことができた。

(2) 中国語母語話者を対象として、身振りによる日本語アクセント指導法について、理論上の提案だけではなく、実際にその指導法を実施し、科学的な知見に基づいた統計的な分析の結果、身振りによるアクセント指導法は、効果があるということを検証した。言語理論および教育理念に基づく、過去の先行研究を踏まえた上で、現在の日本語音声教育指導法の理念による、身振りによる日本語アクセント指導法の効果を検証したのは、本研究の大きな成果である。

(3) 本研究では、身振りを伴う言語課題の観察の際に見られる学習者の口唇部支配運動野の興奮性について、運動生理学的な観点から結果を考察した。従って、これらの結果は、身体の動きを利用した発音指導法の有用性を生理学的観点からも支持するものであると言える。

参考文献

- 相原茂 編著 (2002) 「声調」『中国語学習ハンドブック改訂版』大修館書店。
- 天沼 寧・大坪一夫・水谷 修 (2003) 『日本語音声学』くろしお出版。
- 川口義一 (1996) 「日本語アクセントの指導方法」クロード・ロベルジュ、木村政康編著『日本語の発音指導－VT法の理論と実際－』132. 凡人社。
- 川瀬 生朗 (1990) 「日本語教授法」『日本語教育のための実践的知識と教授法－日本語教育への道』凡人社. 69-91。
- グベリナ・P (1981) 講述, 北原一敬 内藤史郎 編著, 話しことばの原理と教育-言調聴覚法の理論, 216-217, 明治図書。
- 小坏博子・木村政康・川口義一・安富雄平 編(2002) 『聴覚・言語障害教育および外国語教育のためのVTS入門』特定非営利活動法人グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会。
- 小坏博子 (2002) 「身体リズム運動の目的」『聴覚・言語障害教育および外国語教育のためのVTS入門』特定非営利活動法人グベリナ記念ヴェルボトナル普及

- 協会. 67-68.
- 蔡全勝 (1998) 「中国人に見られる日本語アクセントの傾向」『日本語教育研究論』.
- 高見澤孟 (2003) 「いろいろな外国語教授法」『はじめての日本語教育』 アスク13.
- 土岐 哲 (1989) 「音声の指導」『講座日本語と日本語教育』 13.111-138明治書院.
- ひょうご日本語教師連絡会議VT法研究会 (2005) 「VT法の基本的な考え方」『授業で使える発音指導-VT法を活用して』解説書, ひょうご日本語教師連絡会議VT法研究会. vi - x.
- Funase K, Liang N, Tabira T, Tsukazaki I, Narita T and Kasai T (2008) Bilateral facilitation of hand-motor cortices during a reading task. *Adv Exerc and Sports Physiol*, 14: 57-62.
- 船瀬広三 (2008) 「身体運動におけるミラーニューロンシステムに関する研究」18500510『平成18年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』
- Watkins KE, Strafella AP, and Paus T (2003) Seeing and hearing speech excites the motor system involved in speech production. *Neuropsychologia* 41: 989-994.